

今月のみことば 2018年8月

「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。神である主は人に命じられた。『あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。』」(創世記2章15～17節)

聖書を読んだことがなくても、人類の祖先であるアダムとエバが禁断の木の実をとって食べたことはご存知の方が多くはないだろうか。

アップル社のロゴはこれをもとに作られたことが一目見てわかる。

しかし、それは一口かじられた後のりんご(アップル)である。神に反逆してまでも知識の方を選んだ、ということを誇らしく(または自嘲的)に表しているのかもしれない。確かにアップル社の製品は、知識の最先端に行くものばかりであり、そのおかげで、どれだけ知識の普及が容易なものとなったか、その恩恵ははかりしれない。

しかし、聖書が知識の大切さを否定している、と誤解してはならない。

ここで言われているのは善悪の知識である。何を善(good)とし、何を悪(bad)と判断するかという、創造者なる神の専決事項に関与してはならない、ということではないだろうか。

ところが、サタンに欺かれた始祖はそれを食べてしまう。

禁断の果実を食べたぐらいのことがどうしてそれほど問題なのか。文字通りの果実なのか、あるいは何かの象徴なのかは論議が絶えないが、それよりは、何が善(good)で何が悪(bad)かを決めるのは、これからは神ではなく人間になると宣言した、ということが重要なのではないだろうか。

ある聖書学者は、エデンの園でのこの出来事は、神に対する人間の「独立宣言」である、と言ったが、本質を突いていると思う。

「わざわざだ。悪を善、善を悪と言う者たち」(イザヤ書5章20節)に至っては、善悪が完全に逆転してしまっている。しかし、悪を善と呼んだから、といって悪の影響をこうむらないわけではない。悪は必ず破壊的な影響と結果をもたらす。アダムとエバのその後、そして人類史を見る時、そこに破壊と悲惨の歴史が延々と続いていることが、その証左である。

戦前は「お国のために命を捨てる」ことが善とされ、多くの人々が戦場に果てた。日本の降伏を促すため、東京をはじめとする日本の諸都市への空襲が行われたが、それでも降伏を決断しない日本に対し、原爆が広島、長崎に落とされ、終戦までに実に310万人もの人々の尊い命が失われた。

ところが、あろうことか、東京大空襲という、民間人を標的とした未曾有の殺戮を発案、指揮した空軍参謀総長カーティス・ルメイは戦後、勲一等旭日章を授与されている。航空自衛隊の創設に協力したというのがその理由である。

「鬼畜米英」と敵愾心をあおり、英語を「敵性語」として排斥した日本政府の、手のひらを返すような変わりようであった。

人の善悪の基準とは、かくも自分の都合によって便利に変えられるものであることを知る時、私たちに必要なのは、どの時代にあっても変わらない神のことば、聖書以外にはない、と思わざるをえない。

「天地は過ぎ行かん。されどわがことばは過ぎゆくことなし」(マルコ伝13:31)。このイエスのことばによって戦争の苦難を乗り越えたクリスチャンは数知れない。

